



育成センターだより

鹿児島市山下町6-1 Tel 227-1972

【8月の重点指導事項及び着眼点】

- 1 長期休業期間の生活の充実
「早寝・早起き・朝ごはん」等、基本的な生活習慣の確立と体験活動の推進
- 2 危険な遊びの禁止
ナイフ等不要な刃物や危険玩具の所持・使用、危険箇所への立ち入り、遊びの禁止

生きる力をはぐくむ本物の体験を



令和4年6月、当時の末松信介文部科学大臣は、経済界と連携して子どもたちの体験活動を推進するため、「子供の体験活動推進宣言」を発表しました。この中では「次代の社会を担う者として新たな価値を創造する力、対立やジレンマを克服する力、責任ある行動等を身に付けていくためにもリアルな体験活動は重要です。しかしながら、少子化や核家族化、デジタル化が進む中、現代の子供たちはリアルな体験が不足しています」と書かれています。

令和2年度「体験活動等を通じた青少年の自立支援プロジェクト」の調査結果では、「小学校の頃に体験活動（自然体験、社会体験、文化的体験）や読書、お手伝いを多くした子どもは、その後、高校生の時に自尊感情（自分に対して肯定的、自分に満足している、など）や外向性（自分のことを活発だと思ふ）、精神的な回復力（新しいことに興味を持つ、自分の感情を調節する、将来に対して前向き、など）といった項目の得点が高くなる傾向が見られ、小学校の頃に行った体験活動などの経験は、長期間経過

しても、その後の成長に良い影響を与えている」と分析しています。

このように幼少期からの多様な体験は、豊かな人間性、自ら学び、自ら考える力などの生きる力を育てる基盤になると言えます。

以前、1週間の無人島キャンプに参加した時のことです。よく晴れた夕方、子どもたちは海に沈む夕日を見ていました。太陽が海の向こうに完全に沈んだ瞬間、「最後の一滴が沈んだ」と、隣りにいた小学生がつぶやきました。海に沈む夕日を初めて見たらしいのですが、「最後の一滴」という表現は、まさに言い得て妙だと思い、この小学生はこの日の夕日を一生忘れないのだろうかと思いました。

「教育は、感動と感化である」とも言われます。体験で得られた感動等を通じて、子どもにチャレンジ精神や自立心、主体性などが育つとともに、自分自身との対話、実社会との関わりなどを考える契機になります。

長い夏休み中に、普段できない体験をさせてみてはどうでしょうか。



「子どもたちの基準で」



私たちは、活動が終わった際に、「皆さん、よく頑張りましたね」とか「頑張るなさい」などという言葉子どもたちへかけていますが、頑張った、頑張ってもらいたいと判断する際の基準は、どのように決めていますか。

大人が決めた基準により、自分あまり頑張っていないのに褒められても、またその逆に、精一杯頑張ったのに叱咤激励を受けても、子どもたちはうれしくもなく、励みにもならないかもしれません。

子どもたちは、多くの活動の場面で目標を立て、子どもたちなりのこだわりで努力したり工夫したりして活動に取り組み、活動が終わった際には、次時に生かそうと反省（評価）をしています。

これからは、子どもたち一人一人の目線（基準）を意識し、子どもたちなりの取組を認めるような声かけを心掛けていきたいものです。



深夜はいかいは、「非行の入口」です



鹿児島県警察が発表している「令和4年少年白書」によると、令和4年中の不良行為少年1,000人のうち、深夜はいかいで補導された少年は459人で、約半数を占めています。

警察署と育成センターとの情報交換の中で、「友達の家に泊まりに行ったその深夜に外出し、飲酒や喫煙につながった事例が多い」と聞きました。

このように、外泊や深夜はいかいは、「非行の入口」で、非行に走ろうとしている子どものシグナルであると言えます。

深夜はいかいをすると、朝起きられず学校に遅刻したり、学校を休んだりすることが増えるという心配があります。親に叱られ、家庭にも居場所がなくなり、他の居場所を求めて深夜はいかいを繰り返すという悪循環に陥る可能性もあります。昼間に比べ、暗く人通りも少ない深夜は、事件や事故に巻き込まれることも心配されます。

新型コロナウイルス感染症が「5類感染症」となり、子どもたちの外出の機会も増えていきます。また、夏休みに入り、開放感から夜間の外出や外泊、それに伴う深夜はいかいは増えることが懸念されます。家庭では子どもの行動を可能な限り把握し、安易に外泊や夜間外出を認めないようにしましょう。地域では、夜間に外出している子どもを見掛けたら、まず声を掛け、話を聞いてみましょう。